

---

# ドクロを掲げて

ommy

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ドクロを掲げて

### 【Nコード】

N3317BA

### 【作者名】

ommy

### 【あらすじ】

ONE PIECEの世界に迷い込んだ一人の少年を基点に描く異世界冒険物。

朝起きたら、そこは見知らぬ部屋だった。

どこだ、此処？

俺は自室で寝ていた筈だが。

なんでこんな場所に。

ボロっちい木の部屋、いや家。

上下左右と見渡すが、何度見ても初めて見る部屋だ。  
少なくとも、俺の記憶にはない。

「はぁ」

欠伸をしながら、ベットから降りて床に立つ。

あれ？

なんか。

世界が小さく、狭くなったような。

そんな気がした。

なんだろう。

言葉では上手く表現できないが、何かが違う。  
よく分からない違和感。

それが、俺に絡み付いて離れない。

向かい側にあるドア。

其処に向かって歩こうと、足を一歩前に出す。  
すると、身体が揺れた。

ぐわん、ぐわん。

まるで地震で揺れる高層ビルのように、ぐわんぐわんと。

「うわっ」

バランスが保てない。

俺はそのまま揺れて、床にぶつかった。  
痛い。

主に顔がヒリヒリと痛む。

なんだ、これ。

俺は歩くことに失敗したのだろうか。

そんな馬鹿な。

いくらなんでも、それは。

姿勢を直して、もう一度床に立つ。

まだだ。

まだ、そうと決まったわけじゃ。

左足を前に出して、次に右足を前に。

そんな簡単な作業を繰り返すだけ。

なのに。

「わっ」

二度目の転倒。

また。

俺は歩くことが出来なかった。

「くそっ」

床に座り込む。

一体、俺の身体に何が。

膝を床に着けままの状態ですの元まで進む。  
歩けないから、這うしかない。

木で出来た普通のドア。

上半身を張ってノブに手を伸ばす。

が、届かない。

ドアでか過ぎ。

仕方ない。

立ってノブを捻る。

ギギギ、と鈍い音。

ドアが開く。

中途半端に開いたそこから、外を見ると。

「は？」

其処は森だった。

焦げ茶色の樹木。

同色の大地。

色鮮やかな緑の葉っぱ。

普通に森だ。

どうみても、森にしか見えない。

なんで、森？

ワケわからないんだけど。

ギギギ。

ドアを閉める。

「はあ」

這って、ベットまで戻る。

あー、意味分かん。

もう。

何が一体どうなっているのかさっぱり分からない。

ベットに寝転がる。

夢とか。

そんな感じなのかこれは。

天井を見ると、其処は俺の家とは違っていて。

それを、ボンヤリと。

眺めてみる。

……駄目だ。

このままじゃ、状況は何も変わらない。

取り敢えず。

今の状況を整理してみよう。

落ち着いて考えれば、必ず解決法は見つかる筈。  
多分。

先ずは、最初から。

起きたら知らない家だった。

上手く歩けない。

ドアが異常に大きく感じる。

家の外は、森。

そして。

これは今気が付いたことであるが、俺は着ている服が変わっていた。

以上のことから分かるのは。

此所は平均身長が日本より高い外国の森の中で、俺は寝ている間に  
この場所に連れて来られた。  
ということになる。

最も。

今の手掛かりが少ない状況の中では、確実な答えなんてない。

だから、まあ。

そのような考えもある程度に留めておくべきか。

だとしたら。

今、他にすべきことは家の搜索と外に出て人を探す事くらい。

やるとすれば、歩くことが何故か困難な事を考えて、先ずは家の搜索からだろう。

ベツトから降りて、先程部屋を見渡した際に見つけた衣装棚を開ける。

あったのは、フード付きのコートと鞘に入った刀だった。

刀って。

なんて物騒な物があるんだ。

此所は殺し屋の隠れ家かよ。

手にとって本物かどうか確かめてみる。

が。

重い。

刀が本物がどうか見分ける方法の一つに、重さで分かれると聞いた事があるけど。

その理論でいえば、これは本物になる。

だって、めっちゃ重いし。

間違いない。

試しに刀を抜くと、人とか普通に切れそうな刃が出てきた。

駄目だ。

リアル過ぎる。

刀を棚の奥に閉まって、コートを取り出す。

黒と紺色を基調としたそれは、トレンチコートのように丈が長い。微妙に違うけど。

日常で着る服というよりは、漫画や映画で悪役が被ってそうな感じだ。

ポケットに何かないか調べてみる。  
何もない。

コートを棚に戻して、衣装棚を閉める。

後。

この家にあるのは、机だが。

これは、見るだけで何も無いと直ぐに分かる。

って、あれ？

じゃあ、家の搜索はこれで終わりということになる。

案外早いな。

未だ5分掛かってないのに。

本当に何も無い家だ。

余りにも何も無いから、逆に不自然である。

まあ、いいや。

今はこんな状況なんだから、ちょっとやさそつとおかしいくらいじゃ大したことない。

問題は家の外。

仮に人がいるとするなら、日本語が通じないとしても英語が通じるならなんとかなる。

世界で二番目に国と地域で使われている言語だから、それに賭けて外に行ってみる価値は十分にある。

行ってみよう。

本当は何があるのか全く分からないジャングル染みた森になんて行きたくはないが、このままこの家に居ても何の解決にもならないし。



衣装棚から、もう一度刀とコートを取り出す。

もしかしたら、森に野生のワニとかトラみたいな危険や肉食獣がいるかもしれないし、その対策として刃物はあった方がいい。考え過ぎかもしれないが、準備はしっかりやるべきだ。

まあ。

本当は銃とか飛び道具類があれば一番良かったのだけれど。

この際文句は言えない。

むしろ、普通の家には刀なんてないのだから、それがあったことに感謝すべきだろう。

流石に。

身一つでワケのわからない森を超える勇氣は、俺にはない。

刀を手に持つ。

人に見られたら銃刀法違反で捕まるかもしれないが、今の状況を考えればそれ位のマイナス要素は仕方がない。

後は。

何の役に立つかは知らないが、一応コートを羽織っておく。

まあ。

外は寒いし、防寒具の役割くらいにはなるだろう。

歩行の補助の為、刀を杖代わりにしながら地面を歩く。

「つと」

歩きにくい。

杖を突いて歩くと、こんなに大変なのか。

日本に帰ったら、杖を突いて歩いている人の荷物を持ったりとかしてみよう。

こんなことになって、やっと大変さが分かった。

金具部分が錆びていて、開閉しづらいドアを開らく。  
外に出る。

広がっていたのは相変わらずの森だ。

それに少し辟易しつつ、森の中へ入っていく。

ザクツ。

途中通った木に刀で印を付ける。

小屋への帰り道を確保しておく為だ。

まあ。

ベット以外何も役に立つ物がないあの場所に戻る可能性は少ないが。  
もしも、ということもある。

森を抜けた先に、人が居ないことだってあるかもしれない。

最悪の場合を想定して、寝場所くらいはあった方がいいだろう。

十歩程歩いたら、鞘から刀を取り出して木に傷を付ける。

そのような作業を繰り返しながら、深い森の中を歩く。

感じていた違和感。

歩く距離に呼応して、それが段々と小さくなっていく。

何かが噛み合うような。

そんな感覚だ。

やっぱり、外に出て正解だったかもしれない。

予想していた猛獣とかも出ないし。

やがて。

歩いていた時に感じていた違和感も無くなり、刀を腰に括り付けて  
歩いていると。

建物の集合住宅が視界に入った。

体内時計にして3時間くらいだろうか。

時計は無いから正確な時間は分からないが、疲れた。  
やっとか。

結局、猛獣とかには合わなかったな。

まあ合わないにこしたことはないのだから、運が良かったと思って  
おこう。

後は、人に会うことが出来れば。

街へ向かう。

現代日本では余り御目にかからない古風なヨーロッパ風の街並み。  
それは、どこか新鮮で。

此処が外国であるという事実を改めて認識させられた。  
同時に。

日本へ帰りたい気持ちも。

余計な誤解を招きそうな刀をコートの中に隠して、街の入り口であ  
る門の前に立つ。

入口となっていた門の上側ある看板。

それにはアルファベット文字で「北の海、<sup>ノースホル</sup>マール島」と書かれてい  
た。

なんだ。

これ。

意味が分からない。

どこの言語なんだ。

というか、なんでローマ字？

もしかして。

これには、俺の知らないフランスとドイツとかでの別の読み方があ  
って、偶然日本語読みが成立しているのだろうか。

偶然に。

……疑問はもう一つある。

もし日本語読みが正しいとするなら、北の海ってなんだ？  
何処の海だよ。

そんな海、地球上にあったか？

駄目だ。

無理。

全く予想が付かない。

一旦考えるのは辞めて、保留しておこう。

現実逃避的な思考であるが、仕方ない。  
だって。

仮にそうだとしたら、この世界は。

門を潜って、街の中に入る。

取り敢えず人だ。

誰か人に会って、色々と聞いてみよう。

整備されていない道路を歩く。

街を外からみた時にある程度分かっていたことだが、やはりこの街  
には人が殆どいない。

寂れているのか、何処か街の空気自体も閑散としている。

何かあったのか？

街の規模は小さく、直ぐに街の反対側の門まで辿り着く。  
どうする？

建物から漏れる音で、中に人がいるのは分かる。

雰囲気的に少し行きにくいが、建物を訪ねてみるか？

この街で一番大きな建物。

看板にBARと書かれた店の前に立つ。

他の街は、何処にあるか分からないし。

たとえ行き先分かってても体力的にそろそろ限界だから無理だ。

だから、この街で何か得ておかないと。

扉を開けて、建物の中に入る。

「ゲハハハハッ」

店には、海賊のコスプレみたいな服を来た中年の男達が酒を飲んで何やら話していた。

日本語で。

良かった。

どうやら言葉は通じるらしい。

カウンターで飲み物を入れている比較的話が通じそうなバーテン服の男の元に行く。

「おい、待て坊主」

が。

酒を飲んでいる男の一人に声を掛けられた。

「此所はお前みてえなガキの来る所じゃねえ。失せろ。ガキはガキらしく、お家に帰ってママのおっぱいでも吸ってな」

ママのおっぱいって。

俺はもう高二だから、そのような事はないんだが。

まあ、向こうから話し掛けてくれたのは好都合だ。

この際だから、彼に聞こう。

「すみません」

「あ？」

男が酒を飲むを止めて、此方を見る。

「もし良かったら携帯電話を貸して貰えませんか？」

「ああ？ 何言ってるんだ。てめえ」

「いえ。外国に旅行に着ていたんですが、パスポートや携帯電話が入った鞆を無くしてしまって、もし良かったら携帯電話とかを貸して頂けたらと」

「はあ？ …… なんだ、こいつ。おい、野郎共っ。頭のオカシイ餓鬼が一人紛れこんでるぞっ。痛みつけてやれっ」

え？

男は何故か、周りにいた仲間達に俺を痛みつけるように言った。

いや、は？

意味が分からない。

俺は何か彼の堪に障るような事を言ったのだろうか。

質問する側として、俺なりにきちんと礼を尽くした積もりだったが。

ニヤニヤと愉悅の表情を浮かべて、此方を見てくる男達。

彼等は席を立つと、指を鳴らしたながら俺の方へ来る。

マジかよ。

こんなことで、人を殴ったり蹴ったりするのか。

あり得ないだろ。

よく分からない展開に動揺していると、既に目の前には男の拳が顔

の前まで迫っていた。  
なっ。

反射的に目を瞑る。  
無理だ。

喧嘩なんて小学生の時ふざけてやっただけで、本気の殴り合いなんて一度もしたことない俺がこんなパンチ避けられるわけが。

殴られるっ

「え？」

一瞬の静寂。

次いで上がったのは、驚きの声。

それは一体誰の物だったか。

予想した一撃が来なかった俺か。

もしくは自身の拳に何の感触も得られなかった男か。

はたまた、それを見物していた他の男達か。

多分、全員だろう。

何故なら。

俺の身体は霧のように霞んで、男の拳をすり抜けたのだから。

霧となって消えていく。

それは俺。

それは身体。

それは

「なっ、なんだこいつ」

男達の驚く声が聞こえて、俺は男が殴った場所。

自身の胸を見る。

それは霧のように霞んで、男の拳を呑み込んでいた。

「は？」

なんだ、これ。

一体どうなってるんだ。

俺って身体をこんな風に出来たっけ。

「ロ、ロギアだ。こいつ、悪魔の実の能力者だ。それもロギア系の」

男の一人が叫ぶ。

ロギア？ 悪魔の実？ おいおい、それって漫画じゃないか。

何アホな事言ってるんだ、こいつ。

今はそんな状況では。



「ロ、ロギア!？」

信じられないといった表情で男達が此方を見る。

それはとても真剣で。

冗談を言っている感じではない。

本気で俺が悪魔の実の能力者だと信じきって、驚いている目だった。なんだ、こいつら。

正気じゃない。

悪魔の実は、漫画の中の架空の果実だぞ。

そんな物、現実にあるわけが。

確かに。

俺も、此処が現代日本じゃないかもしれないとは薄々思っていたが、いくらなんでも漫画ということはないだろう。

この身体はきつと、別の何か。

そう、何か他の。

「おい、お前らっ。ズラかるぜ。能力者が相手じゃ分がわりい」

逃げていく男達。

その中にはまるで化け物でも見るかのように、此処を怯えた目で見  
る奴等もいる。

なんだよ、それ。

さっきまでは俺を馬鹿にするような目で見ていた癖に。

余りにも理不尽じゃないか。

たったそれだけで態度を変えるなんて。

「だ、大丈夫でしょうか？」

バーテン服を着た男がカウンターの向こう側から、恐る恐るといった感じで声を掛けてくる。

大丈夫？

いや、まあ。

肉体的には無傷だけど、色々あり過ぎて精神的にはパンク寸前だ。これは果たして、大丈夫だと答えるべきなのだろうか。

「あのう、お座りになられては」

現実逃避気味に色々考える俺に、バーテン服の男は散らばった椅子を元の位置に戻しながら言った。  
そうだな。

取り敢えず、椅子に座ろう。

「ありがとうございます」

口から出た言葉は棒読みだった。

どうやら俺は自身の思っている以上に動揺しているのかもしれない。  
落ち着こう。

冷静にならないと。

男達が座っていた机側ではなく、カウンター側の割りと綺麗な椅子に座る。

アルファベット文字で書かれたメニューが目に入る。

M I L K      2 0 0

A P P L E      2 5 0

C O F F E E      3 0 0

あれ？

通貨が書かれていない。

そういえばこの地域の通貨って何なんだろう。

円？

ドル？

それとも、ベリー？

男の言っていた事を仮に事実すれば、此処の店の通貨はベリーなるが。

「すみません」

「はい。なんでしょう？」

「俺って記憶喪失みたいで色々と忘れていて、それで一つ聞きたいですが。通貨ってベリーですよ？」

「それはお気の毒に。通貨はベリーです。全世界共通で使えます」

「そうですか。ありがとうございます」

「いえ」

最悪だ。

通貨がベリー。

それも全世界共通で。

これって、この世界がワンピースの世界だってほぼ決まりじゃないか。

いや、でも。

信じられない。

この世界が漫画の中だなんて。

今話してるバーテン服の男も、さっき話した男達も。皆。

漫画のキャラクターだなんて、信じられるわけが。

「ミルクです」

目の前に、湯気を出している白い液体の入ったコップが置かれる。前を向くと、バーテン服の男が無表情で此方を見ていた。飲めってことか？

「いや、俺金無いんだけど」

「お気になさらず。お代なら既に頂きましたから」

そう言つて、作業に戻るバーテン服の男。  
よく分らないが、金は入らないらしい。

「そう？　なら貰おうかな。ありがとう」

コップを取つて、ミルクを飲む。

それは、温かくて、甘くて。  
旨い。

美味しい。

牛乳つて、こんなに美味しかったのか。  
心のざわめきがずっと消えていくのを感じた。  
そうだ。

まだ、何も終わってない。

この世界が、ワンピースの世界だとしても。  
そうじゃないにしても。

俺のやることは、一つだけ。

日本に帰る。

それだけだ。

そして、俺は日本からこの世界に来た。  
だから。

この世界から日本に帰る方法はきつとある。

「すいません。ゴールド・ロジャーって海賊を知ってますか？」  
「ゴールド・ロジャー」というあの海賊王の？」

この反応。  
ゴールド・ロジャーは実在するのか。  
それも。

既に海賊王として。  
なら。

やはり、この世界はワンピースの。

「ええ。その海賊王のゴールド・ロジャーです」

「それなら勿論知っていますが、それが何か？」

「はい。彼が処刑されたのは何年前でしたか教えて頂ければ。何分記憶が混乱しているので」

「畏まりました。海賊王、ゴールド・ロジャーが処刑されたのは、確か」

「確か？」

「私が28の時だったので、もう17年も前かと」

何か。

大切な事を思い出すかのように、男は目を細めた。

「そう、ですか」

17年前。

ということは、今は物語が始まる5年前になるのか……。

まあ、此処が本当にワンピースの世界であるならだが。  
もしかしたら、違う可能性もある。

海賊王と世界共通通貨ベリー。

そして、アルファベットの文字。

そして、悪魔の実。

確かに。

ほぼ決まりだろう。

これ以上ない証拠が揃っている。  
でも、まだ。

モンキー・D・ルフィ。

物語の中心がない。

答えを出すのは、彼の存在を確認してからだ。

「ミルクありがとうございます。お陰で心が落ち着きました」

「いえ、貴方にはあの海賊共を追い払って頂いた恩がありますから」

「あの海賊共？ それってさっきまでいた奴等のことですか？」

「はい。あの男達はこの海一帯を支配しようとしているミラサキ海賊団の一員なんです。船長が名のある海賊で、それを笠に着てあいつらはこの街で好き勝手に」

「そうなんですか。それは……お気の毒に」

「いえ、何時もの事です。それに今日は、普段は偉そうなあいつらの腰を抜かした姿を見てすっきりしました。貴方のお陰です」

力強く笑うバーテン服の男。

なんで、笑える？

海賊に街を好き勝手荒らされてるんだろ。

もつと怒ったり、悲しんだり。

普通はそうするだろ。

理解出来ない。

諦め？

達観？

「いえ、俺はお礼を言われるような事は何もしていませんから」

席を立つ。

「ミルク。美味しかったです。本当にありがとうございます」

頭を下げて、店を出る。

なんとなく。

この店にはもう居たくなかった。

店を出て、行く宛もないままに街を歩いた。

海賊に狙われるのを恐れてか、外には相変わらず人はいない。時刻は既に日が落ちようとして、空は夕焼けに変わっている。

目を閉じてみれば。

思い出すのは、先程の小汚い男達とバーテン服の男。

彼らは、海賊と市民で。

支配する側と支配される側。

そう、海賊。

この世界には、海賊がいる。

それも、映画やアニメに出てくるようなヒーローではなく、犯罪者としての海賊が。

まあ。

此处は、ワンピースの世界かもしれないのだから、当然といえば当然だが。

「待つて」

突然。

後ろから、声を掛けられた。

随分と高い声だ。

女性だろうか？



「何か用？」

思考を中断。

振り返って、声の持ち主を見る。

ピンクブロンドの髪。

左目の下にある泣き黒子。

意思の強そうな瞳を持った、少女だった。

「貴方、悪魔の実の能力者って本当なの？」

何、それ。

さっき海賊達が言ってた事なのに。  
もう、知っているのか。

「……分からない」

「え？」

「分からないんだ。俺も。自分が悪魔の実の能力者なのか、どうか」

そもそも。

仮に、悪魔の実があつたとして。

仮に、俺が能力者だったとして。

なら俺は、一体何の実を食べたのか？

それすら分からないのだ。

海賊達は自然系ロギアだと言っていたが……。

「そう、でも貴方、ミラサキの一味を追い払ったんでしょ？ 強いんでしょ？」

「確かに追い払いはしたけど、それは」

悪魔の実、海賊達がそう言った不思議な力のお陰だ。

そう続けようとした俺に。  
少女は。

「ならっ、ミラサキを殺してよ!」

そんな事を言った。

静まり返る街。

死人のようだったそれが、彼女の言葉に反応して揺れた気がした。

「え？」

つい。

口から漏れる、疑問の声。

彼女は今、何を。

目の前の少女が当然のように、然れど、万感の思いを込めて言った  
言葉が信じられなくて。  
彼女を見る。

「っ」

少女は泣いていた。

目から涙を流して、泣いていた。

一体。

彼女とミラサキという海賊の間に何があったのか。

「だ、大丈夫？」

少女に近付いて、様子を窺う。

「……ご、ごめんなさい。取り乱しちゃって」

彼女は、頬を伝う涙を指先で拭う。

「いや、構わないよ。気にしないでくれ」

よく分からないけど、彼女は泣いていた。

それには、きつと。

俺の知らない何かがあったのだろう。

「話してくれないか？ 君とミラサキという海賊の間に何があったのかを。何か力になれるかもしれない」

「え、でも。それは」

「俺には関係ないこと、か？」

「そう」

頷く少女。

なんか、急にしおらしくなったな。  
それが少しだけ可笑しくて。

思わず、笑みが溢れる。

「これは私の問題なの。だから貴方に話すことは」

「さっきは、俺に殺してくれて言ったのに？」

「……ごめんなさい。貴方の話を聞いたら、つい感情が溢れちゃって。でも本当に、もう」

早口で捲し立て、この場から立ち去ろうとする少女の腕を掴む。

「いいよ。頼ってくれて。どうせ、暇だし。それに今、俺の力を本当に必要としてるのは、俺じゃなくて君だろ？」

自分でも。

なんて、くさいセリフを言っているのだろっと思う。

でも、同時に。

今の彼女には、これくらい言わなければ伝わらないと思った。

「……ありがとう」

空つ風が吹く寒い外で話すのもどうかと、少女が言ってくれたので、俺たちは近くにあるという彼女の家まで向かうことにした。

家へと向かう道。

互いに自己紹介をしながら、街を歩く。

「私はミュレっていうの。マールという言葉で、勇気っていう意味。父が勇ましく生きるようにって、付けてくれたのよ。変な名前でしょ？」

「いや、君にピッタリの良い名前だと思うよ」

「本当？」

「ああ、勿論」

「ふふふつ、ありがと。貴方の名前は？」

「イズミ。由来は、確か。実家の近くに綺麗な泉があつて、父はその泉のように心の綺麗な人に俺に育って欲しくて付けたいらしい」

「へえ。素敵なお父さんじゃない」

「ありがと。偉大な父さ」

父親を褒められ、嬉しくて笑う俺に、彼女も釣られて笑う。

「あつ、此処が私の家」

住宅街にある、レンガで出来た二階建ての赤い家で、彼女は止まった。

先程のバーと、ちょうど向かい側。  
珍しい偶然もあるものだ。

「素敵な家だ」

「ふふつ、ありがとう。さつ、入って」

「ああ、お邪魔します」

家の中には、暖炉があつて、外形と同じように旧ヨーロッパ風の  
内装だった。

凄い。薪なんて使うのは、生まれた初めてだよ。

「何か飲む？ コーヒーか紅茶くらいしか、ないけど」

「そうだな。コーヒーにするよ。紅茶の甘さは少し、苦手だね」

「分かったわ。直ぐに作るから、椅子にでも座って待ってて」

「了解」

木で出来た丸太の椅子に座る。

少し、ゴリゴリしていて尻が痛い。

でも、それが逆に、らしさがあつて良かった。

「はい、コーヒー」

丸太の大きな机に、木のコップが置かれる。

中に入っていたのは、茶色の液体。

未だ淹れたばかりなのか、湯気が立っていて、温かそうだ。

「ありがとう」

コップの取っ手を取って、コーヒーを口に入れる。  
上手い。

「美味しいよ」

向かいの椅子に座って、紅茶を飲んでいる彼女に言う。

「そう。良かったわ」

口からコップを離して微笑んだ彼女に、笑顔を返す。

彼女の紅茶を啜る音。

俺のコーヒーを啜る音。

暖炉の燃える音。

僅かな沈黙の後、ミュレは真剣な表情で此方を見た。

「聞いてくれる？ 私とミラサキのこと」

「ああ、勿論」

先程よりも、少しだけ低い声で。  
彼女は語り始めた。

自身とミラサキの関係を。

一人じゃない。

人は、いつだって。

一人じゃない。

だからこそ。

一人になったとき。

人は泣くのだろう。

「私の父はね、医者だったの。街で唯一の、医者」

ミュレは持っていたカップを静かにテーブルの上に置く。

「いくら小さな街と言っても、街の住民は200人。それだけの人達をたった一人で、相手にするのは無理があるわ。でも、父はそれをやっていたの。対して儲けがあるわけでもないのにね」



「格好いいお父さんだね」

「そう。格好良かったわ。父は私の理想で、誇りだった」

そこで彼女は一度視線を切り、窓を見つめた。

外は既に日が落ちていて、空は暗い。

夜空に浮かぶ月だけが、世界を照している。

「それが壊れたのは、父が何時ものように患者さんを見ていた日の午後のことだったわ。時刻はちょうどお昼を回り、そろそろ昼食でも取ろうとした時に、あいつらが来たの」

「あいつらって、ミラサキの？」

「いいえ、違うわ。来たのはクロイエ海賊団と言って、マーラ島近辺の海を支配してた海賊達。彼らはミラサキ海賊団との争いで船医を失い、負傷した仲間の治療を求めて家に来たの」

「それで、お父さんは彼らの治療を？」

「そう。私は海賊なんてほっとけばいいって言ったのに、父は私の言葉に耳を傾けないで彼らを治療しようとした」

「しようとした？」

「……出来なかったのよ。クロイエ海賊団がこの場所に居るという情報を掴んだミラサキが、この家に襲ったから」

「まさか」

「そう。そのまさか。父はその時に殺されたの。ミラサキ海賊団の手によって。敵対しているクロイエ海賊団の治療を阻止する為にね」

「……」

「おかしい話でしょう？ 父はただ医者として、怪我をしている奴はどんな悪人でも見過ごせないって、相手が海賊という事に関係なく治療しようとしたのに。それなのに、その海賊達の勝手な都合によつて殺されたんだから」

「……そうか」

「……家に帰ろうとした時、偶然ミラサキの部下達が酒場から出ていくのを見たの。彼らは貴方の事を“悪魔の実”の能力者だと言って恐れていたわ。それを聞いた私は貴方ならミラサキ達をなんとか出来るんじゃないかと思って、酒場から出たイズミの後を付けた」

そう……だったのか。

だから、彼女はあんなにも。

「本当にごめんなさい。貴方には何も関係のない事なのにね」

「いや、謝るのは俺も同じだよ。気軽に助けになれるかもしれないなんて言つて、何も出来ないそうにないんだから。……ごめん」

「ふふつ、なんで貴方が謝るの？」

窓から視線を戻して、ミュレが此方を見る。

その顔は父の死を悲しんでいるでもなく、海賊達を憎んでいる様子

もなかった。

また、だ。

また、その顔。

なんで？

なんで、この街の人達は笑えるのだろう。

こんなにも悲しい過去を背負っているのに。

「はーあ、あつ。もう、こんな時間。そろそろ寝ないとね」

彼女は両手を天井へ向けながら、背伸びをする。

「寝る場所はお父さんの寝室があるから、其処を使って。部屋を出て左の奥にあるから」

椅子から立ち上がってミュレはそう言うと、そのまま部屋を出た。

……つて、え？

泊まっていい、のか？

確かに、俺は帰る場所が無いけど、それでも今日あったばかりの異性なんだから、不用心過ぎると思うが。

「……」

まあ、いいか。

本人が特に気にしてなさそうだし。

ミュレが残っていた片方のランプを持って、部屋を出る。廊下を左側に進み、父親の寝室であるという部屋へ向かう。

廊下は日本にいた頃と違って、少し狭い。外国、いやこの世界の一般的な民家はこんなものなんだろうか。

金属のプレートが掛かったドア。あった。これが。プレートには、アルファベット文字で「ウィルバー」と書かれている。

名前かな？

だとしたら、彼女の父親の……。

ドアを開けて、部屋に入る。其処は埃とかの汚れはなく、綺麗な状態のままだった。

ベットにある布団も綺麗に畳まれていて、いつ誰が来ても使えるようにきちんと整理されていた。

使いづらい。

なんでミユレは、こんなに思いの籠った場所を、今日あったばかりの俺に使わせてくれるのだろうか。

コートを脱いで、刀をベットの下に、ランプをベットの横にある机にそれぞれ置く。

「はあ」

蠟燭の火を消して、ベットに横たわる。

天井を見ていると襲ってくる眠気。

ああ……眠い。

に……しても……

本当に……色々あったな……

今日は。

チュンチュン。

雀の鳴く声。

布団の心地好い感触。

太陽の日射し。

眩しい。

窓を見ると、いつの間にかカーテンが開いていた。  
うっ。

思わず、カーテンを閉める。  
もう、朝か。

ベットから起き上がって、壁を見詰める。昨日は確か、ミュレの家  
で寝たんだよな。

部屋を見渡す。其処は自分の部屋でも、木の小屋でもない。

書物で埋め尽くされた部屋。

そう呼ぶのにふさわしい場所だった。  
昨日この部屋を訪れた時は既に夜で、蠟燭の灯りだけではよく分  
らなかったが。こんな部屋だったのか。

傍にある本を手にとって、中身を見てみる。中に書かれていた文字  
は、相変わらずのアルファベット文字で読みにくい。何やら医療の  
内容であるようだが、よく分からない言葉ばかりだ。

本を閉じて、元の場所に戻す。やっぱり医者って、頭良いんだろう  
な。覚えなきゃいけないことも、たくさんあるし。

欠伸をしながら部屋を出る。廊下を歩いて、昨日ミュレと話した部  
屋に行くと、彼女はいなかった。その代わり、机の上にコップと皿。  
それぞれ、中に牛乳が、上にパンと目玉焼きが置かれていた。

食えってことか？

椅子に座って、パンをかじる。

暖かい。

パンは暖かくて、牛乳は冷たい。  
作りたて、なのかな？

部屋をぼんやりと眺めながら、そんな事を思った。

別れの挨拶をしたくてミュレを待ったが、とうとう彼女が来ることはなく俺は部屋を出た。

多分、学校が何かなんだろう。彼女くらいの年齢なら、そのような教育機関に通っていてもおかしくない。

あれだけ世話になったのだから、責めて挨拶はしておきたかったが、まあ、この島にいる限りは彼女に会うこともあるだろうから、その時に非礼を詫びればいいか。これが最後の出会いというわけではないんだし。

島を海沿いに歩く。

特にすることは無かったが、何となく。海を見たかった。日本ではもう余り見ないような、綺麗な海を。

もし、俺が本当に悪魔の実の能力者なら。この海に飛び込めば、溺

れて死ぬ。泳げなくて、身動きも取れないまま、海の底に沈むのだろ。

海を眺める。

水は透き通っていて、気持ちよさそうに泳いでいる魚達が見えた。本当に綺麗だ。

「あー」

潮の匂い。

心地好い風。

なんで、こんなことになってんだろ。

俺はなんで。こんな場所に居るのだろ。何か意味があるのかな。

だとしたら、いいな。

何の意味も無いとしたら、俺はどうやって生きていけばいいか、分からない。

「おう、どうした。坊主。こんな所で。今にも死にそうな顔して」

「別に。ただ、海を眺めていただけです。お爺さんこそどうかしたんですか？ そんなずぶ濡れで、風邪を引きますよ」

なんか。海を眺めていると、変なお爺さんに声を掛けられた。

外は季節が冬なのか、それともこの地方では元々の気温なのかは分からないけど、こんなにも寒いというのに。



何故か、ずぶ濡れで、半袖ビーサンのお爺さんに。

「がっはっはっは、それには及ばないわい。今は夏だからのう。此れくらいがちょうどいい格好なんじゃよ」

夏って、マジか。こんなに寒いのに。なら、冬は一体どれだけ寒いんだよ。

「そうですか。お元気なんですネ」

「がっはっはっは、なあに普通じゃよ。むしろ、少し衰えたくらいじゃ。昔の儂は、もっと元気バリバリのナイスガイじゃったからのう」

「それは、凄いですね」

「そうかのう？ 儂にはお主が元気なさ過ぎな気がするが。病人みたいな面して、それでもお主は若者か？」

「放つといて下さい。生まれた時から、こんな顔なんですよ」

「そうか、それは悪いことを言ったのう。スマン！ 許してくれ」

「許すも何も、別に怒っていませんよ。貴方が謝る必要はないです」

「そうか！ 怒つたらんか。そりゃ、良かったわい。がっはっはっはっは」

なんだ、この爺さん。……酔っているのか？  
横を向いて、爺さんの顔を見る。

「なんじゃ？ 儂の顔に何かついておるかのう？」

「いえ、すみません。何もありません」

顔は赤くない。普通。酔ってはいないようだ。

なら、なんなんだ。この陽気具合は。もしかして、素でこれなのだろうか。

そんな馬鹿な。どれだけ陽気なんだ。

「本当に、お元気なんです。いつそ羨ましいくらいに」

「なんじゃ？ やっぱ、なにかあったのか？ どれ、言ってみろ。儂が聞いてやるわい」

爺さんは、がっはっはっはと豪快に笑いながら、俺を見る。

本当に。

どれだけ、陽気な人なんだ。

そんなの、人の悩みを聞く態度じゃないよ。

「どうしたらいいか、分からないんです」

でも、その笑顔に、陽気さに、少しだけ心が暖かくなって。この人になら、話してもいいと思えた。

「最近、色々あり過ぎて、もうどうしたらいいのか。自分が何をすればいいのか、分からなくて。心がぐちゃぐちゃで、何も考えられないっていうか。何も考えたくないっていうか」

「……」

「やるべき事は一つだって、決まってるのに。分かった筈なのに。それを出来そうになくて。どうやって前に進めば良いのか、分からないんです」

「よく言った！ 天晴れじゃ」

「え？」

爺さんは、バシバシと俺の背中を叩く。

「人は弱い生き物じゃ。皆必死に本心を隠そうとする。知られぬのが恐ろしいからじゃ。自分以外の誰かに、自身の醜い気持ちを知られぬのがのう」

「……」

「だが、お主は言った！ それも今日会ったばかりの何処の馬とも知れぬ、怪しい爺にじゃ。これを天晴れと言わず、なんと云う。天晴れじゃ！ お主は本当に、天晴れじゃ！」

「……ありがとうございます」

信じられなかった。こんな反応を返されることも。弱音を言ったのに、褒められたことも。全てが新鮮で、初めての経験だった。

「よしっ、決めたぞ！ 儂はお主を気に入った。どうじゃ、お主」

でも、だからこそ俺は。その後、余計に驚いたんだ。

だって。

この人の良さそうな陽気な爺さんが。

まさか

「儂の仲間にならんか？ 儂が船長を務める、クロイエ海賊団の仲間に」

海賊だなんて、思わなかったから。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3317ba/>

---

ドクロを掲げて

2012年1月13日18時48分発行